

千葉県学習協『資本論』講座⑤（2022年10月16日）

講師：宮崎礼二（明海大学経済学部 准教授）

## 第2分冊講義②

# 第5回：新版『資本論』

## 前回の復習

### 第三篇 絶対的剰余価値の生産

#### 第五章 労働過程と価値増殖過程

##### 第二節 価値増殖過程

《以上、前回未終了部分》

#### 第六章 不変資本と可変資本

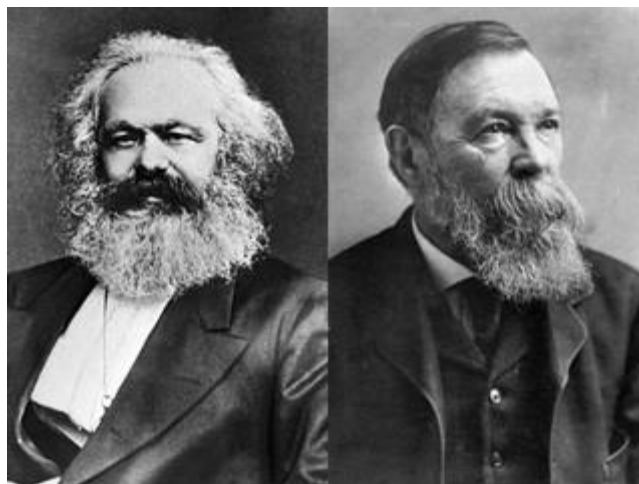
#### 第七章 剰余価値率

##### 第一節 労働力の搾取度

##### 第二節 生産物の比率的諸部分での生産物価値の表現

##### 第三節 シーニアの「最後の1時間」

##### 第四節 剰余生産物



新日本出版社新版ページ番号は【 】

( ) 内の番号はヴォルケ版『資本論』原書のページ番号を付記

## 前回（9月18日）の復習

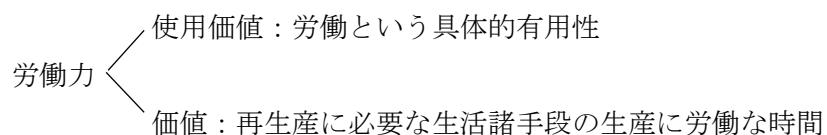
### ◎ 資本の一般的定式の矛盾

- 商品交換の法則＝等価物どうしの交換において、どこで価値が増えるのか？  
「等価物どうしが交換されても剰余価値は生じないし、非等価物どうしが交換されてもやはり剰余価値は生じない。流通または商品交換はなにも価値を創造しない。」

【pp. 284-285】 (pp. 177-178)

### ☛ では、どこで剰余価値が生じるのか？

- 商品としての労働力の消費過程＝流通部面の外⇒生産過程において生じる



- ☛ 労働力の使用は労働。労働力の買い手は、その売り手を労働させることによって労働力を消費

## 《前回未了部分》

### 第2節 価値増殖過程

#### 1. 剰余価値が生まれる仕組み

- ▶ 「そこで、こんどはわれわれは、生産過程を価値形成過程として考察することにしよう」 【p. 325】 (p. 201)
- ⇒ 「商品そのものが使用価値と価値との統一であるのと同様に、商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一でなければならない。」 【p. 325】 (p. 201)

- ▶ 糸製造（綿花から糸）の例 【pp. 325-332】 (pp. 201-205)

■ 原料：綿花 10 重量ポンド = 10 シリング + 労働手段：紡錘 = 2 シリング  
= 12 シリング ← 24 時間労働 = 2 労働日

■ 労働力の日価値 = 3 シリング = 6 労働時間

→ 1 労働時間 =  $1 \cdot \frac{2}{3}$  重量ポンドの綿花を  $1 \cdot \frac{2}{3}$  重量ポンドの糸に転化  
(紡績)

→ 6 時間で 10 重量ポンドの綿花を 10 重量ポンドの糸

( $1 \cdot \frac{2}{3}$  ポンド × 6 時間) へ

= 3 シリング

■ 糸 = 綿花 + 紡錘 + 紡績過程 (糸製造労働)

2 労働日

6 時間 =  $2 \cdot \frac{1}{2}$  労働日

↓

↓

生産手段

紡績労賃

12 シリング

+

3 シリング

= 15 シリング = 糸 10 重量ポンド

■ 10 重量ポンドの糸 = 15 シリング

→ 1 重量ポンドの糸 =  $15 \text{ シリング} \div 10 \text{ 重量ポンド} = 1 \text{ シリング } 6 \text{ ペンス}$

■ 「わが資本家は愕然とする。生産物の価値は、前貸しされた資本の価値と同じなのである。前貸しされた価値は増殖せず、なんらの剰余価値も生まなかつたのであり、したがって貨幣は資本に転化しなかつた。」 【p. 331】 (p. 205)

→ 糸の価値 = 綿花 + 紡錘 + 労働力 → 諸価値の合計

☆ 補足：別の度量単位での表現

- ・ 労働力の価値 = 3000 円 = 6 時間労働 = 労働力の再生産費用
- ・ 原料：綿花 10kg = 1 万円 + 労働手段：紡錘 = 2000 円 = 計 1 万 2000 円  
 ★ 3000 円 + 1 万 2000 円 = 1 万 5000 円 = 前貸し資本
- ・ 1 労働時間 =  $1 \cdot 2 / 3$  kg の綿花 →  $1 \cdot 2 / 3$  kg の糸に転化  
 ⇒ 6 時間：10kg の綿花を 10kg の糸 ( $1 \cdot 2 / 3$  kg × 6 時間)
- ・ 糸 =  $\underbrace{\text{綿花} + \text{紡績}}_{2 \text{ 労働日}} + \underbrace{\text{糸製造過程}}_{6 \text{ 時間} = 1/2 \text{ 労働日 (1 日 12 時間労働)}} \text{ (労働力)}$   
 ↓ ↓  
 1 万 2000 円 + 3000 円 = 1 万 5000 円 = 糸 10kg  
 ★ 糸 10kg = 1 万 5000 円 = 糸の価値 (糸 1kg = 1500 円)  
 ☛ 前貸し資本 = 糸の価値：価値の増殖はない

- ▶ 「労働者を二四時間のあいだ生かしておくために半労働日が必要だということは、労働者がまる一日労働することを決してさまたげはしない。」 【p. 336】 (p. 208)  
 ⇒ 「したがって、労働力の価値と、労働過程における労働力の価値増殖とは、二つの異なる大きさである。」 【p. 336】 (p. 208)

■ 労働力商品の独特な使用価値 = 「…決定的なのは、この商品の独特な使用価値、すなわち価値の源泉であり、しかもそれ自身も持っているよりも多くの価値の源泉であるという独特な使用価値であった」 【p. 337】 (p. 208)

▶ 6 労働時間から 12 労働時間への延長

「…労働者は、作業場において、六時間だけでなく、一二時間の労働過程に必要な生産諸手段を見いだす。一〇重量ポンドの綿花が六労働時間を吸収して一〇重量ポンドの糸に転化したのであれば、二〇重量ポンドの綿花が一二労働時間を吸収して二〇重量ポンドの糸に転化するであろう。」 【p. 337】 (p. 208)

■ 糸 =  $\underbrace{20 \text{ 重量ポンド綿花} + \text{紡錘}}_{4 \text{ 労働日}} + \underbrace{\text{紡績過程 (糸製造労働)}}_{12 \text{ 時間}} = 5 \text{ 労働日}$   
 ↓ ↓  
 生産手段 紡績労賃  
 24 シリング + 3 シリング = 27 シリング

■ 20 重量ポンドの糸 = 30 シリング

⇒ 前貸しされた価値 27 シリング + 3 シリング

= 「こうして二七シリングは三〇シリングに転化した。それは、三シリングの  
剰余価値を生んだ。手品はついに成功した。貨幣は資本に転化した。」

【p. 338】 (p. 209)

☆ 補足：別の度量単位での表現

労働時間の延長：6 時間 → 12 時間

糸 = 20kg 綿花 + 紡錘 + 紡績過程 (糸製造労働)

4 労働日

12 時間 (1 労働日) = 5 労働日

↓

↓

生産手段

紡績労賃

★ 糸 20kg = 3 万円

☛ 前貸し資本：生産手段 (2 万 4000 円) + 賃金 (3000 円) = 2 万 7000 円

3000 円価値増殖 = 貨幣の資本への転化

## 第三篇 絶対的剰余価値の生産

### 第六章 不変資本と可変資本

ポイント：労働過程の諸要因が生産物価値の形成においてさまざまな役割を果たす  
⇒ 資本の価値増殖過程における資本のさまざまな構成諸部分の諸機能の特徴を明らかにする

#### 1. 生産的労働における「労働の二重性」

##### ▶ 労働の二面性

■ 労働過程：労働者は「労働対象に新たな価値をつけ加える」＋「生産諸手段の価値は、それが生産物に移転する」

⇒ 「労働者は同じ時間内に二重に労働するのではない。」

「労働対象にたいする新価値のつけ加えと生産物における旧価値の維持とは、労働者が同じ時間内に一度しか労働しないのにその同じ時間内に生み出す二つのまったく異なる結果なのであるから、結果のこの二面性は、明らかに彼の労働そのものの二面性からのみ説明されうる。」 【p. 347】(p. 214)

■ 「したがって精紡工の労働は、その抽象的一般的属性においては、すなわち人間の労働力の支出としては、綿花と紡錘との価値に新価値をつけ加え、紡績過程としてのその具体的、特殊的、有用的属性においては、これらの生産手段の価値を生産物に移転し、こうしてそれらの価値を生産物において維持するのである。そこから、同じ時点における労働の結果の二面性が生じる。

労働の単なる量的な付加によって新たな価値がつけ加えられ、つけ加えられる労働の質によって生産諸手段の旧価値が生産物において維持される。労働の二面的性格の結果として生じる同じ労働のこの二面的作用は、さまざまな現象において手に取るように示される。」 【p. 349】(p. 215)

■ 生産性や原料価格の変動においても労働の二面的作用は貫徹

【pp. 350-352】(pp. 216-217)

##### ▶ 生産手段の価値の移動

■ 「生産手段は、それが生産手段として失う価値だけを生産物に引き渡す。しかし、この点では、労働過程の对象的諸要因によってそれぞれ事情は異なる。」

【p. 352】(p. 217)

■ 労働対象：補助材料（石炭、潤滑油、染料 etc.）と原料

「原料と補助材料は、それらが使用価値として労働過程にはいり込んだときの自立的な姿態を失う。」 【p. 353】(pp. 217-218)

■ 労働諸手段：用具、機械、工場建物、容器 etc.

「最初の姿態を保持し、きのうとまったく同じ形態であすもふたたび労働過程にはいり込む限りにおいてのみ、労働過程で役に立つ。それらは、その存命中に、すなわち労働過程に生産物にたいしてその自立的な姿態を保持するが、その死後にもやはりそうする。機械、道具、作用業建物などの遺骸は、それらの助けでつくられた諸生産物とは依然として別個に存在する。…（中略）…その使用価値は労働によって完全に消費し尽くされ、こうしてその交換価値は完全に生産物に移行したのである。」

【p. 353】 (p. 218)

■ 労働手段の使用価値の喪失とそれに対応する価値の引き渡し

「生産手段は、それが労働過程においてそれ自身の使用価値の破壊によって失う価値よりも多くの価値を生産物に引き渡すことは決してない」

【p. 354】 (p. 218)

■ 労働過程と価値増殖過程との区別

「機械の価値の一〇〇〇分の一が、日々、機械そのものからその日々の生産物に移行する。同時に、生命力がしだいに失われるとはいえ、機械総体は労働過程において不断に作用し続ける。したがって、労働過程の一要因である。ある生産手段は、労働過程へは全体としてはいり込むが、価値増殖過程へは部分的にしかはいり込まない」

【p. 354】 (p. 219)

「他方では、その反対に、ある生産手段は、部分的にしか労働過程にはいり込まないにもかかわらず、価値増殖過程には全体としてはいり込むことがありうる。綿花を紡いで糸にするさいに、毎日一五重量ポンドにつき一五重量ポンドが屑になって糸にはならず、“デビルダスト”にしかならないと仮定しよう。…（中略）…糸の要素をなんら形成しないこの一五重量ポンドの綿花の価値は、糸の実体を形成する一〇〇重量ポンドの綿花の価値とまったく同様に、糸価値のなかに入り込む。一五重量ポンドの綿花の使用価値は、一〇〇重量ポンドの糸をつくるために塵にならざるをえない。」

【p 356】 (pp. 219-220)

▶ 生きた労働の天性

■ 「価値をつけ加えることによって価値を維持するということは、活動している労働力すなわち生きた労働の天性である。この天性は、労働者にはなんの費用もかからないが、資本家には現存の資本価値の維持という多大の利益をもたらす。景気がよいあいだは、資本家は金儲けに没頭しきっていて、労働のこの無償の贈り物には気がつかない。労働過程の強力的中断すなわち恐慌は、彼にこのことを痛切に感じさせる。」

【p 359】 (p. 221)

⇒ 「天候と腐朽の自然法則とは、蒸気機関が回転をやめるからといってその作用を停止しはしない」

【注 23 p. 360】 (p. 221)

## 2. 資本の2つの概念：不変資本と可変資本

「生産物の総価値のうち、その形成諸要素の価値総額を超える超過分は、価値増殖した資本が最初に前貸しされた資本価値を超える超過分である。一方における生産諸手段と他方における労働力とは、最初の資本価値がその貨幣形態を脱ぎ捨てて労働過程の諸要因に転化するさいにとった異なる存在諸形態にすぎない。」

【pp, 362-363】 (p. 223)

### ▶ 2つの資本分類

#### ■ 不変資本

「… 資本のうち、生産諸手段すなわち原料、補助材料、および労働手段に転換される部分は、生産過程でその価値の大きさを変えない。だから私は、これを不変資本部分、または簡単に不変資本と名づける。」 【p. 363】 (p. 223)

#### ■ 可変資本

「これにたいして、資本のうち、労働力に転換される部分は、生産過程でその価値〔の大きさ〕を変える。この部分は、それ自身の等価物と、これを超えるある超過分である剰余価値とを再生産するのであり、この剰余価値はそれ自身変動しうるるのであって、より大きいこともより小さいこともありうる。資本のこの部分は、一つの不変量から絶えず一つの可変量に転化する。だから私は、これを可変資本部分、または簡単に可変資本と名づける。」 【p. 363】 (p. 224)

#### ■ 概念を表わす記号

● 資本=C

● 不変資本=c (constante) ● 可変資本=v (variabel) ● 剰余価値=m (Mehrwert)

★ 生産物価値=c + v + m

## 第7章 剰余価値率

### 第1節 労働力の搾取度

#### 1. 剰余価値率

▶ 「前貸資本 C が生産過程で生み出した剰余価値、すなわち前貸資本価値 C の増殖分は、まずもって、生産物の価値のうち、その生産諸要素の価値総額を超える超過分として現われる。」 【p. 366】 (p. 226)

■  $C = c + v \rightarrow$  例：前貸資本 £ 500 = £ 410 (c) + £ 90 (v)

$\Rightarrow$  生産過程  $\Rightarrow C' = (c + v) + m$

£ 410 (c) + £ 90 (v) + £ 90 (m) = £ 590

■  $c = £ 410 =$  原料 £ 312 + 補助材料 £ 44 + 機械設備の摩滅 £ 54



▶ 「…CはC'に転化する。既述のように、不変資本の価値は生産物において再現するにすぎない。したがって、過程において現実に新たに生み出された価値生産物は、過程から得られた生産物価値とは異なるのであって、それゆえ、一見そう見えるように、 $(c + v) + m$  すなわち (四一〇ポンド (c) + 九〇ポンド (v)) + 九〇ポンド (m) ではなく、 $v + m$  すなわち (九〇ポンド (v) + 九〇ポンド (m)) なのであり、五九〇ポンドではなく、一八〇ポンドなのである。」 【p. 368】 (p. 227)

■ 「剰余価値は、 $v$  すなわち労働力に転換された資本部分に生じる価値変化の結果であるにすぎず、したがって  $v + m = v + \Delta v$  ( $v$  プラス  $v$  の増加分) である。」 【p. 369】 (p. 228)

⇒ 注意点

① 「…現実の価値変化と価値が変化する割合とは、前貸総資本の可變的構成部分が增大するために前貸総資本もまた増大するということによってあいまいにされる。」

→ 「過程を純粹に分析するためには、生産物価値のうち普遍的資本価値が再現するにすぎない部分を完全に捨象すること、すなわち、不変資本  $c=0$  とすることが必要」

【p. 369】 (p. 228)

② 「九〇ポンドは一つの与えられた、したがって不変の大きさであり、それゆえこれを可變の大きさとして扱うことは不合理であるように見える。」

→ 「労働力の購入に前貸しされた資本部分は、一定分量の対象化された労働であり、したがって、購買された労働力の価値と同様に不変の大きさの価値である。しかし、生産過程そのものにおいては、前貸しされた  $\pounds 90$  に代わって活動する労働力が、死んだ労働に代わって生きた労働が、静止している大きさに代わって流動している大きさが、不変の大きさに代わって可變の大きさが、登場する。その結果が、 $v$  の再生産プラス  $v$  の増加分である。」 【pp. 369-370】 (p. 228)

⇒ 「もちろん、剰余価値の割合については、直接に剰余価値を生み出し、剰余価値によってその価値変化が表わされる資本部分にたいする割合だけでなく、前貸総資本にたいする割合も、大きな経済的意義をもっている。そこで、われわれはこの割合を第三部で詳しく扱う [第三卷、第一篇、第二章「利潤率」、参照]。」 【p. 370】 (p. 229)

★ 「そこで、われわれは、さしあたり不変資本部分をゼロに等しいとする。」

【p. 371】 (p. 229)

■ 可變資本価値が価値増殖した割合： $m/v \Rightarrow 90/90 = 100\%$

⇒ 「可変資本のこの価値増殖のこの割合または剰余価値の比率的大きさを、私は剰余価値率と名づける。」 【p. 372】 (p. 230)

## 2. 2つの労働時間：必要労働時間と剰余労働時間

### ▶ 必要労働・必要労働時間

「…、労働日のうち労働者が労働力の日価値、たとえば三シリングを生産する部分においては、彼は、ただ資本家によってすでに支払われた労働力の価値の等価分を生産するだけであるから、したがって新たに創造された価値によって前貸可変資本価値を補填するだけであるから、価値のこの生産は単なる再生産として現われる。だから私は、労働日のうち、この再生産が行なわれる部分を必要労働時間と名づけ、この時間中に支出される労働を必要労働と名づける。」 【p. 373】 (pp. 230-231)

### ▶ 剰余労働・剰余労働時間

「労働者が必要労働の限界を超えて苦勞して働く労働過程の第二の期間は、確かに労働者に労働を費やさせる、すなわち労働力を支出させるのであるが、しかし彼のためにはなんらの価値も形成しない。それは、無からなにかを創り出すという魅力をいっばいたたえながら資本家を魅惑する剰余価値を形成する。私は、労働日のこの部分を剰余労働時間と名づけ、この時間中に支出される労働を剰余労働 (surplus labour) と名づける。」 【pp. 373-374】 (p. 231)

## 3. 搾取度＝剰余価値率

▶ 「可変資本の価値は、この資本によって購買された労働力の価値に等しいのであるから、また、この労働力の価値は労働日の必要部分を規定するが、剰余価値のほうは労働日の超過部分によって規定されるのであるから、次のような結果が生じる——剰余価値の可変資本にたいする比は、剰余労働の必要労働にたいする比と等しい。すなわち、剰余価値率  $m/v = \text{剰余労働} / \text{必要労働}$  である。」

【p. 375】 (pp. 231-232)

「…剰余価値率は、資本による労働力の、または資本家による労働者の搾取度の正確な表現である。」 【p. 375】 (p. 232)

■ 紡績工場の例【pp. 377-378】(p. 233)

不変資本

綿花 1 万 600 重量ポンド	£ 342			
前紡機+蒸気機関	£ 20			
工場賃借料	£ 6			
補助材料 石炭	£ 4 · 1/2	} £ 10	} £ 378	} £ 430
ガス	£ 1			
油	£ 4 · 1/2			
可変資本				
労賃	£ 52			

糸価値	£ 510 ポンド
剰余価値	$£ 510 - £ 430 = £ 80$
剰余価値率	$£ 80 / £ 52 = 153 \cdot 11 / 13\%$
v + m	$£ 52 + £ 80 = £ 132$
平均労働日 (10 時間)	$52 / 132 : 80 / 132 = 10$ 時間
	必要労働時間 : 3 · 31 / 33 時間    剰余労働時間 : 6 · 2 / 33 時間

第 2 節 生産物の比率的諸部分での生産物価値の表現

「資本家がどのようにして貨幣を資本にするのかを示した例に立ち戻ろう」【p. 380】(p. 234)

1. 労働時間の構成諸部分で表現した生産物価値

▶ 精紡工の必要労働時間 : 6 時間    剰余労働時間 : 6 時間    搾取度 : 100%

「彼が雇う精紡工の必要労働時間は六時間、剰余労働も同じく六時間、したがって労働力の搾取度は一〇〇%であった。」【p. 380】(p. 234)

⇒ 12 時間の生産物 = 糸 : 20kg → 30 円

糸の生産物価値 = c + v + m

30 円の糸価値 = 24 円 (c) (= 綿花 20 円 + 紡錘 4 円) + 3 円 (v) + 3 円 (m)

不変資本 (c) : 20kg の糸     $c = 24 \text{ 円} / 30 \text{ 円} = 8 / 10 \Rightarrow 20\text{kg}$  のうち 16kg の糸中に存在

● 16kg (c) の糸のうち

綿花 :  $20 \text{ 円} / 24 \text{ 円} = 5 / 6 \rightarrow 16\text{kg} \times 5 / 6 = 13 \cdot 1 / 3\text{kg}$

紡錘など :  $16\text{kg} - 13 \cdot 1 / 3\text{kg} = 2 \cdot 2 / 3\text{kg}$

⇒ 「一六重量ポンドの糸は、綿花、紡錘、石炭などの変装したものにすぎない」 【p. 382】 (p. 236)

● 「四重量ポンドの糸は、いまや、一二時間の紡績過程で生産された六シリングの新価値以外のものはなにも表さない」 【p. 382】 (p. 236)

⇒ 4kg (v + m) のうち、必要労働 = 2kg + 剰余労働 = 2kg  
 6 円 3 円 3 円

### 第3節 シーニアの「最後の1時間」説

▶ ナッソー・W・シーニア

「工場主たちは、近ごろ公布された工場法〔1833年の工場法〕と、それを乗り越えてさらに進もうとしている一〇時間運動とに対抗する、懸賞試合の闘士として彼を選んだのである。」 【p. 385】 (p. 238)

■ 工場主の常用の計算方法

「…わが精紡工は、たとえば彼の労働日の最初の八時間には綿花の価値を、次の一時間三分には消費された労働諸手段の価値を、次の一時間二分には労賃の価値を生産または補填し、そしてかの有名な『最後の1時間』だけを工場主に、すなわち剰余価値の生産にささげる、と。」

⇒ 「生産物の諸部分が完成してならべられている空間から、それらが相次いでたどる時間に翻訳したものにすぎない」

「実践的には価値増殖過程に利害関係をもつとともに、理論的にはこの過程を誤解することに関心をもつ人々の頭脳にあっては、ことにそうである」

【p. 384】 (p. 237)

■ シーニアによる生産物の構成の労働時間での読み替え表式

糸の価値 30 シリング = 24 シリング (c) + 3 シリング (v) + 3 シリング (m)  
 12 時間労働日 = 9 時間  $\frac{3}{5}$  (c) + 1 時間  $\frac{1}{5}$  (v) + 1 時間  $\frac{1}{5}$  (m)

「…労働者は最後から二番目の一時間で自分の労賃を生産し、最後の1時間で諸君の剰余価値または純利得を生産する。」 【p. 389】 (p. 239)

⇒ 価値移転と価値形成とが労働の二重性によって同時に行われていることを無視した議論

★ 労働時間の短縮 = 資本家の利得が消滅してしまう、との考え

⇒ 労働時間短縮 (10 時間運動) に抵抗するための論理

## 第4節 剰余生産物

### 1. 剰余生産物

- ▶ 「生産物のうち剰余価値を表わしている部分（第二節の例では二〇重量ポンドの糸の1/10すなわち二重量ポンドの糸）を、われわれは、剰余生産物（surplus produce, produit net [フランス語で「純生産物」]）と名づける。」

【p. 395】(p. 243)

- ▶ 「剰余価値率が、資本の総額に対する剰余価値の比率によってではなく、資本の可変的構成部分にたいする剰余価値の比率によって規定されるのと同じように、剰余生産物の高さも、総生産物の残部にたいする剰余生産物の比率によってではなく、必要労働を表わしている生産物部分にたいする剰余生産物の比率によって規定される。」

【p. 395】(p. 243)

## 第3篇 絶対的剰余価値の生産

### 第8章 労働日

労働日：「必要労働と剰余労働との合計、すなわち労働者が彼の労働力の補填価値を生産する時間と剰余価値を生産する時間との合計は、彼の労働時間の絶対的大きさ——労働日（working day）を形成する。」

【p. 397】(p. 244)

#### 第1節 労働日の諸限界

##### 1. 定量部分と可変部分

【pp. 398-399】(pp. 245-246)

- ▶ 必要労働時間 ab：6時間の場合

労働日Ⅰ：bc=1時間 a ————— b—c …………… 7時間

労働日Ⅱ：bc=3時間 a ————— b ————— c …………… 9時間

労働日Ⅲ：bc=6時間 a ————— b ————— c ……12時間

- 必要労働時間 ab：定量 剰余労働時間 bc：可変量

- ▶ 剰余労働時間 bc の必要労働時間 ab の比率 (bc/ab)

労働日Ⅰ：1/6 = 16・2/3%

労働日Ⅱ：3/6 = 50%

労働日Ⅲ：6/6 = 100%

- 剰余労働時間/必要労働時間 = 剰余価値率

▶ 剰余価値率は労働日の大きさは示さない 【p. 399】(p. 246)

「たとえばそれが一〇〇%であるとしても」「それは、労働日の二つの構成部分、すなわち必要労働と剰余労働とが等しい大きさであることを示すであろうが、この部分のそれぞれがどのような大きさであるかを示しはしないであろう。」

⇒ 「労働日は不変量ではなく可変量である。」

「…その全体の大きさは、剰余労働の長さまたは継続とともに変動する。」

## 2. 労働日の2つの制限：最小限度と最大限度の制限

▶ 最小限度の制限

「確かに、延長線 bc、すなわち剰余労働をゼロとすれば、一つの最小限度、すなわち労働者が自己を維持するために一日のうちどうしても労働しなければならない部分が残る。しかし、資本主義的生産様式の基礎の上においては、必要労働はつねに彼の労働日の一部分になるうらだけであり、したがって労働日がこの最小限度にまで短縮されることは決してありえない。」 【p. 400】(p. 246)

⇒ 資本主義的生産：価値増殖（剰余価値生産）を通じて貨幣は資本へ転化し、「休みのない運動のみが資本家の直接的目的」 【p. 266】(p. 168)

= 「剰余価値の生産が資本主義的生産の規定的目的」 【pp. 395-396】(p. 243)

▶ 最大限度の制限：二重の規定

■ 労働力の肉体的な制限：肉体的な諸欲求（食事、睡眠、休息、入浴、着替え etc.）

■ 社会慣行的な制限：知的・社会的な諸欲求 = 一般的文化水準によって規定

⇒ 「…労働日の変化は、肉体的および社会的な諸制限の範囲内で行なわれる。しかし、この二つの制限はきわめて弾力性に富むものであって、変動の余地はきわめて大きい。こうして、八、一〇、一二、一四、一六、一八時間からなる労働日、したがってきわめて相違なる長さの労働日が存在するのである。」

【pp. 400-401】(p. 247)

▶ 「一労働日とはなにか？」「相違なる長さの労働日が存在」 【p. 401】(p. 247)

■ 「自然の一生活日より短い。」

■ 「資本家としては、彼はただ人格化された資本にすぎない。彼の魂は資本の魂である。ところが、資本は唯一の生活本能を、すなわち自己を増殖し、剰余価値を創造し、その不変部分である生産諸手段で、できる限り大きな量の剰余労働を吸収しようとする本能を、もっている。」 【p. 401】(p. 247)

「資本とは、生きた労働を吸収することによってのみ吸血鬼のように活気づき、しかもそれをより多く吸収すればするほどますます活気づく、死んだ労働である。」

【p. 401】(p. 247)

### 3. 商品交換の法則

- 「…資本家は商品交換の法則を楯に取る。彼は、他のすべての買い手と同じように、彼の商品の使用価値からできる限り大きな効用を手に入れようとする。」  
【p. 402】 (p. 247)
  - 「僕が君に売った商品は、その使用が価値を創造し、しかもそれ自身が値するよりも大きな価値を創造するという点で、他のありきたりの商品とは区別される。これこそ君がこの商品を買う理由であった。」  
【p. 402】 (p. 248)
- ⇒ 「資本の増殖として現われるもの」 = 「労働力の余分な支出」

### 4. 労働日の無制限の延長に対する闘争宣言

#### ▶ 標準労働日の要求 【p. 403-404】 (pp. 248-249)

- 「僕は毎日、労働力の正常な持続と健全な発達とに合致する限りでのみ労働力を流動させ、運動に、すなわち労働に転換しよう。労働日を無制限に延長することによって、君は、一日のうちに、私が三日間かかって補填できるよりも多くの量の僕の労働力を流動させることができる。こうして君が労働において得るものを、僕は労働実体において失うのである。」
- 「…僕の労働力の日々の販売価格を媒介にして、僕は日々この労働力を再生産したがってまた新たに売ることができなければならない」 = 労働力の再生産

↓

「君は僕に絶えず『儉約』と『節制』の福音を説教している。」

↓

「よろしい！僕は、分別ある儉約な一家のあるじのように、僕の唯一の財産である労働力を節約し、そのばかげた浪費はいっさい節制することにしよう。」

↓

「君は三日分の労働力を消費しながら、僕には一日分の労働力を支払うのである。」

↓

「これは、われわれの契約および商品交換の法則に反する。」

「…僕は他のすべての販売者と同じように、自分の商品の価値を要求する」

↓

「僕は標準労働日を要求する。」

#### ▶ 同等な権利対権利 【p. 405】 (p. 249)

##### ■ 資本家の権利

「資本家が労働日をできる限り延長し、できることなら一労働日を二労働日にしようとする場合には、彼は、買い手としての彼の権利を主張する。」

## ■ 労働者の権利

「…売られた商品の独特な本性は、買い手がこの商品消費することへのある制限を含んでいるのであって、労働者が、労働日を一定の標準的な大きさに制限しようとする場合には、彼は売り手としての彼の権利を主張する。」

- ★ 「…どちらも等しく商品交換の法則によって確認された権利対権利という一つの二律背反が生じる。同等な権利と権利とのあいだでは強力がことを決する。こうして、資本主義的生産の歴史においては、労働日の標準化は、労働日の諸制限をめぐる闘争——総資本家すなわち資本家階級と、総労働者すなわち労働者階級とのあいだの一闘争——として現われる。」





千葉県労働者学習協会  
『新版 資本論』第2分冊講義②